

新しい学習指導要領への対応

— 教科における表現力の育成 —

近藤 智 (済美高等学校)

1. はじめに

新高等学校学習指導要領の実施について、文部科学省では、平成24年4月1日の入学生から年次進行で、数学、理科及び理数を先行して実施することとしている。そのため、新学習指導要領の改善の趣旨や内容の理解を深め、特色ある教育課程を編成・実施するため、全国で教育課程等についての研修会が行われており、岐阜県も例外ではない。

県内で行われる研修会等に参加し、文部科学省発刊の解説書等を読み深めていくと、今回の改訂の基本的なねらいの一つに、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視することがあげられており、各教科の目標には、「表現力の育成」、そして、「言語活動の充実」を掲げた表現に改訂されている。数学科の目標について、現在の学習指導要領では、「事象を数学的に考察し処理する能力を高め」とあるが、新学習指導要領では、「事象を数学的に考察し表現する能力を高め」とある。数学という科目の性質上、どうしても知識習得や内容の理解、あるいは処理能力の育成に力点が置かれる授業が多く行われてきた。そのため、数学的に考察し処理した結果を解釈し表現する力、あるいは、人に対して分かりやすく伝える力等の育成に着眼した授業、表現する能力を高めるような授業等は少なく、まだまだ、その授業の研究、改善の余地が十分あると考える。

2. 研究の目的

本校に入学してくる生徒の多くは、義務教育段階での学習内容を確実に身につけているとはいえない実情があり、学習意欲や学習習慣はもとより生活上でも多くの課題を持っている。また、言語に関する能力は高くなく、自分の思いや考えを表現する力にも乏しい。そこで、平成21年3月に告示された学習指導要領総則第5款の5、教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項(1)「各教科・科目等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること」を取り上げ、生徒の言語活動が充実するような授業を研究し、本校に入学した生徒一人一人が判断力や表現力を向上させることによって、地域に信頼される学校づくりに寄与することを目的とした。

3. 実施内容

4月～5月	生徒の学力及び表現力の調査。教科の年間指導計画の見直しと修正
6月	研究授業の実施：生徒が主体的に参加する授業の在り方
8月～9月	補充授業の実施と研修会への参加（岐阜県高等学校教育課程講習会）
10月～11月	公開授業の実施と中間まとめ
12月	学校視察～中学校・地域から信頼される学校作りについて～
1月～3月	授業実践：言語活動の充実と表現力の育成

4. 授業実践 I

言語活動の充実を視野に入れた授業展開は、教科（数学科）において、解答及び別解の発表や証明問題の解説発表、応用問題のグループ討議など様々な方法が考えられる。その中で、証明問題の解説発表を取り上げ、言語活動の充実を図る授業を実践した。

科目：数学A

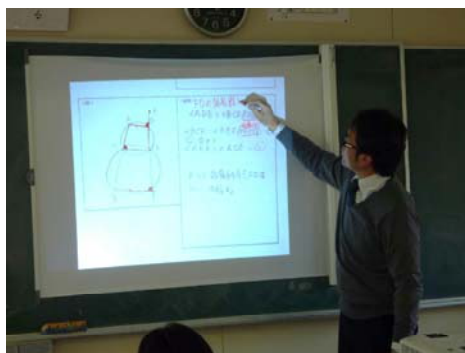
方法：証明とは、ある事柄が正しいということ、あるいは矛盾しているということについて根拠を挙げて明らかにしていくことである。しかし、生徒にとって、この根拠を挙げて明らかにしていくことが難しい。まず、①何を示せば正しいといえるのか、根拠の示し方、筋道の立て方そのものがわからない。そして、②示すべき内容がわかっても、その過程を数学的な記号や言語を使って表現できない。③証明できたとしてもその証明を発表しようとする、正しく分かりやすく説明できない。上手に伝えられない。以上3点の難しさがある。そこで、その難しさを克服し、証明問題を理解させ、言語活動を充実させる授業とするため、3段階のstepで進めることとした。

内容：**step1 真似る**……証明問題に全く手のつけられない生徒にとって模範解答は重要である。そこで、例題を丁寧に解説し、証明していく手順と書き方を真似させることから始めた。この段階は、言語活動に入る前の段階である。まずは、混乱する頭の中を整理し、手順を踏まえ論理的に考えられるよう、問題の筋道の立て方を学ばせた。OHC（オーバーヘッドカメラ）を利用し、生徒の答案を丁寧に直し、証明の仕方、数学特有の記号を利用した書き方を指導した。

step2 発表する……真似る学習をした後、自らの答案をOHCにて写し、証明を発表させた。書かれた証明をただ読むのではなく、より具体的に、相手にわかってもらうよう、分かりやすい説明の仕方を意識させた。

step3 ブラッシュアップする……発表された答案を他生徒が、書きくわえたり、書き直したりして、より分かりやすい表現にしていった。そして、発表の仕方や説明の仕方、伝え方をフリートキングという形式で改善していった。ただし訂正されることや書き加えられることは良いことであり、間違いをおそれないというクラス雰囲気となるよう事前に配慮が必要であった。

成果と課題：**step1 真似る**では、どうしても解答例を自分本意に解釈してしまい、解答を省略して書く生徒が見られた。1つずつ順を追って根拠を示しながら解答していくことになれていないことが伺えた。しかし、OHCにて、生徒の答案に言葉を付け加えたり、書き直したりすることで改善され、模範解答を参考にした証明が書けるようになっていった。**step2 発表する**では、予想通り、はじめは、書いてある証明をそのまま読むだけの生徒がほとんどであった。しかし、**step3 ブラッシュアップする**の段階でフリートキングにより、改善点や修正点が多く出され、その後の発表者は、分かりやすく伝えることを意識してより丁寧な説明になっていった。



step1：生徒の答案の手直し



step2：自らの答案の発表

OHC を利用した授業は、板書時間の短縮だけでなく、1つの証明問題に対し、何人もの生徒の答案をその場で、生徒同士でブラッシュアップすることができ、興味を引く利点がある。ねらい通り、生徒同士のブラッシュアップは積極的になされ、活発な授業となり、言語活動の充実がはかれたものと思う。しかし、数学科は、処理能力や知識の習得も大事であり、「真似る→発表する→ブラッシュアップする」の3stepの授業を展開する時間的余裕がないことも現実である。

5. 授業実践Ⅱ

本校には、若手教員で構成する「若手教科指導研究会」が存在する。そのメンバーの協力を得てそれぞれの教科における表現力の育成に着眼した授業を実践した。その実践例を報告する。

科目：体育

方法：従来の授業では、コミュニケーション能力を高めるため、また、なれ合いを防ぐため仲の良い友人同士でのグループ形成は行っていない。そのため、なれ合いを防ぐ一定の効果はあるものの人間関係の壁にぶつかり結果として、コミュニケーション不足を招き、さらには、授業不参加という状態を生み出してしまった。そこで、学校生活でのグループを重視し、仲の良い友人を中心に据えたグループ形成を行うことで、コミュニケーションの充実をはかり、積極的な授業参加に繋がるよう試みた。

内容：バレーボールなどの競技において、準備運動から片付けまでをすべて各グループ単位で行う。また、グループ同士の試合を行う。その際、どうしたら勝てるのか、自分たちのグループの弱点は何か、また、その弱点を克服する練習メニューは何か等を恒常的に考えさせ、話し合わせ、実施させた。

成果と課題：普段の生活と同じ友人とグループ形成したことから、もともと仲がよいため、運動の苦手な生徒を得意な生徒が援助する行為が目につくようになった。そのため、運動能力の高い生徒も低い生徒も積極的に授業に参加するようになった。コミュニケーションも充実しており、その結果授業に活気が生まれた。ただ、本来、誰とでもコミュニケーションがとれ、どんなグループであろうと協力し合い、積極的に授業に参加できなければならない。そのための仲の良いグループ形成からそうでないグループ形成へ段階を踏んで発展させるような単元計画の改善が課題である。

科目：家庭総合

方法・内容：“既存の雑誌やチラシ、広告、パンフレットなどを画用紙に切り貼りし、言葉ではうまく表すことのできないイメージを表現”→“簡単なコメントを書く”→“抽象的な表現を具体的表現へ変換”→“クラス全員でイメージを共有しコミュニケーションを図る”というコラージュ療法（心理療法）を応用した授業を行った。さらに、発展的学習として、小論文形式に書ける様式（書き込み式）のプリントを配布し、そのプリントをもとに話し合うことでより一層の言語活動が充実した授業となった。

成果と課題：コラージュを用いることで、言葉ではうまく表現できない生徒やイメージを絵で表現できない生徒も容易に表現することができた。そのため、コメントも書きやすく、その後のコミュニケーションもうまくとれるようになった。また、抽象的なものでも、言葉を用いて表現ができることを理解させることができた。コミュニケーションを図れば楽しいということが実感でき、書くことも苦痛ではなくなってきたようである。伝え方、文章の書き方がわかったことにより、自分の考えをうまく伝えられるという喜びに変えられた授業であった。しかし、まだ、型どおりの文章しか書けないという課題も生じた。今後は、「自由な表現」「個性のある文章」「独創性」などを育む授業をしていきたい。

科目：ホームルーム活動

方法：1995年の阪神淡路大震災を教材に用い、映像や当時神戸市に在住していた被災者でもある教員が体験談を語り、生徒が具体的なイメージを持てるよう配慮する。その上で都市直下型地震に見舞われると被害の状況や、そのとき個人としてどのような行動が取れるかを防災についての問題を提起し、バズセッションにて討議させる。また、その考えを文章にまとめさせる。

内容：本来であれば支援する立場にある市役所や県庁も建物が倒壊するなど被災した。そうした中で警察や消防、医師をはじめ一般職員や教員も不眠不休で被災者の援助や避難所での世話にあたった。自ら被災者でありながら立場上支援する側に回らなければならなかった方が大勢みえた。もし、その同じ立場であったとすれば、どう動けるか。社会の一員としての自覚と責任及び職業観や勤労観の育成も含め考えさせた。

成果と課題：2011年は東日本大震災が起きたこともあり、興味関心は非常に高く、それぞれのグループで白熱した討議がされていた。バズセッションの形態をとったことで全員が参加し、それぞれ自らの考えを述べられていた。生徒の中には、看護師や教員を目指す生徒もおり、その立場をイメージしながら語られている部分もみられた。課題としては、自分の思いや考えを伝える表現が乏しく友人とのしゃべり言葉になってしまう傾向も見られた。人にものを伝えるとき、順序だてて分かりやすく伝える伝え方もあわせて指導していく必要を感じた。

6. 課題・展望

表現力とは、短期間で養える力ではない。ましてやある特定の教科・科目に限って育成する力でもない。家庭、学校、地域など、生徒が成長していく過程で関わるすべての対人関係において培われるものである。その中で学校は、生徒の生活の基盤をなしており、その教育活動全体を通してコミュニケーション能力（表現力）を養ってきた。特に、特別活動や総合的学習の時間では、言語活動が充実した授業が多く行われてきた。しかし、教科については、高校の学習段階からいって知識技能の習得が重視される傾向があり、表現力の育成を主眼においた授業は、あまりなされてこなかった。今回、新学習指導要領への対応の1つとして、教科における表現力の育成をどう行うべきかを研究題材として、その授業方法を探ってきた。数学において OHC を利用した授業では、1つの答案を見ながら生徒全員で意見を交わしながらその場で手直ししていく（ライブ指導）ことで、言語活動が充実した授業を展開することができた。しかし、間違えることを極端におそれる生徒や人前で話すことを苦手とする生徒にとってライブ指導は、苦痛である。そういった生徒も、いかに積極的に授業に参加させられるかが、今後の課題の1つでもある。

言語活動を充実させ、表現力を育成する授業とは、生徒同士が積極的に意見を交わすような、全員参加型の授業が大切である。若手教科指導研究会の授業実践についても、生徒同士が意見を交わし、積極的に参加する点で共通する。今後、電子黒板やタブレット端末の使用等によって、学校現場の授業は大きく変わっていくであろう。しかし、どんなに道具が変わっても言語に関する能力、つまり表現力を育成するのは、人である。「人が人を育てる。」という当たり前のことを今一度見直し、生徒自らが積極的に参加する全員参加型の授業、そして、生徒同士で意見交換し、手直ししていくライブ指導を取り入れた授業を大切に今後も授業研究に取り組んでいきたいと思う。